

二つのレーニン論

Two Recent Studies on Lenin

池田 嘉郎*

要旨

本稿では、ロバート・サーヴィスの『レーニン』とエレヌ・カレル＝ダンコースの『レーニンとは何だったか』という、近年邦訳の出た二つのレーニン論を素材にして、ソ連期ロシア史研究の今後の可能性についての考察を行なう。サーヴィスの著作が、ロシア史の特殊な文脈を極力離れて議論を展開しようとするのに対して、カレル＝ダンコースの著作は、ロシアの政治家としてのレーニンに一貫してこだわっている。本稿の筆者は、後者の姿勢により大きな可能性があると考えているものである。本稿の構成を示すと、史料状況・研究動向を概観した後、1)レーニンのパーソナリティ、2)レーニンとソ連体制の歴史的位置づけ、の2点について、両著作の内容を検討する。

はじめに

近年、わが国では、レーニンに関する大部の著作があいついで翻訳された。一つ目はイギリスのソ連史家ロバート・サーヴィスの『レーニン』であり、二つ目はフランスのロシア史家エレヌ・カレル＝ダンコースの『レーニンとは何だったか』である。二つの著作はともにソ連解体後の新史料を用いて、ソ連創設者レーニンの人格、政策、および歴史的意義に、あらたな光を当てることを試みている。両者はいずれも、一個人の分析を通じて、ロシア革命とソ連という歴史的現象についての認識をも新たにしてくれる好著である。そこでこの小論では、サーヴィスとカレル＝ダンコースのレーニン論を素材にして、ソ連期ロシア史研究の前に開かれている可能性について考えてみたい。なお二つのレーニン論を比較するという発想は、塩川伸明氏の要を得た論稿「二つのゴルバチョフ論」から想を得ていることを記しておきたい(1)。

※

ソ連時代、レーニンの手になる文書は党・政府の厳重な管理下に置かれていた。一方ではソ連当局は、聖典であるレーニンの文書の刊行に大きな力を注ぎ、『レーニン全集』(第5版)55巻、『レーニンスキー・ズボールニク〔拾遺集〕』15巻、『レーニン活動年譜』12巻、さらに『ソヴェト政権法令集』(1997年に第14巻刊行)などに、彼の文書(余白への書き込みなども含む)24000点以上が公表された。だが他方では、レーニンの多くの文書はイデオロギー的・技術的な理由から公表が禁止され、共産党中央委員会のアーカイヴに厳密に保管されていた。1990年の時点で、レーニンの手になる文書(書き込みも含む)約3700点、および彼が署名した公的文書約3000点が、未公表のままであった(2)。

それらの文書が公表されなかった理由は、以下のように大別できる。

- 1) 国家機密を含むか、陰謀的性格をもつとみなされた場合(ソ連の外交・財政・その他の国家利害に関わるもの、外国とその諸政党の利害に関わるもの)
- 2) イデオロギー的に不適切とみなされた場合(公定レーニン像および歴史像に抵触するもの)。
- 3) 技術的・学術的な問題がある場合(判読不能、鑑定上の疑義)。
- 4) 技術的・財政的な問題がある場合(とくにレーニンの手が入っている政府議事録の全てを刊行しようとするれば、膨大な手間がかかった)(3)。

ソ連崩壊前後から多くのアーカイヴ史料の解禁が進み、これらのレーニン文書もまた、様々な文献において引用・発表され始めた。とくに1994年には、エリツィン大統領の軍事顧問で元ソ連国防省軍事史研究所所長のドミートリー・ヴォルコゴーフが、二巻本『レーニン』を著した(4)。この著作は、レーニンの家系図やインッサ・アルマンドとの恋愛関係、ドイツによる資金援助など、ソ連本国でタブーとされていた問題のある程

*IKEDA, Yoshiro [情報文化学科]

度まで明らかにしたものの、時代状況を見逃して道徳的裁断を下そうとする姿勢が顕著であるため、歴史研究としての深みには乏しい(5)。

1996年にはアメリカのリチャード・パイプスが、史料集『知られざるレーニン』を編纂した(6)。パイプスが第一級のロシア史家であることは論を俟たないのであるが、レーニンの評価に関する限り、支配欲や残虐性といった個人的な性質を、必要以上に強調する傾向がある。この本に取められた史料も、共産党政権のテロルに関わるものをはじめとして、ミスリーディングな注釈が付されていることが多い。

こうした恣意的な文書解釈に対する反論の意味もこめて、1999年にはロシアの研究者たちによって、史料集『ヴェ・イ・レーニン：知られざる文書 1891 - 1922』が刊行された。そこには未公表のレーニン文書332点が、充実した注釈つきで収録されている(7)。これは良心的な仕事であるが、いまだ多くの文書がアーカイヴで研究者を待っていることには変わりがない。

本稿で取り上げる二つのレーニン論のうちでは、カレル＝ダンコースのものが先に出た。彼女は現代フランスを代表するロシア史家の一人で、ムスリム世界に焦点を当ててソ連の民族問題を論じてきたことで知られる。その彼女が1998年に書いたのが『レーニン』で、その邦訳『レーニンとは何だったか』は2006年に刊行された(8)。この著作は、史料面ではヴォルゴゴノフとパイプスに大いに依拠しており、とくに独自の史料を活用しているわけではない(9)。だが史料面での弱さは、骨太な歴史把握によって補われている。とりわけ彼女は民族問題の専門家であるだけに、ロシア帝国全体の変動という文脈の中でレーニンを捉えようとする姿勢が顕著に見られる。

もう一つのレーニン論の著者サーヴィスは、現代イギリスを代表するソ連史研究者の一人である。サーヴィスのレーニン論の原題は『レーニン：伝記』で、2000年に刊行された後、2002年に邦訳『レーニン』が出た(10)。この本は、サーヴィスがそれまでに著した『レーニン：政治的人生』全三巻(1985年、1991年、1995年)を圧縮したもののだが、独立した書物としてのまとまりを備えており、史料も増補されている。カレル＝ダンコースと異なり、サーヴィスは多くのアーカイヴ史料を渉猟している。なかでもレーニンの身内の回想を巧みに利用したことで、サーヴィスはレーニンのパーソナリティを克明に描出することに成功している。その反面、レーニンやロシア革命の歴史的な位置づけについては、サーヴィスの議論はやや特色に欠けるようにも思われる。

カレル＝ダンコースとサーヴィスのレーニン論はともに大部であり、注目すべき論点を数多く含むものであるが、以下では「レーニンのパーソナリティ」と「レーニンとソ連体制の歴史的な位置づけ」の二点に絞って論じてみたい。

1. レーニンのパーソナリティ

まず、レーニンのパーソナリティについて見てみたい。この点に関しては、既に述べた通りサーヴィスの著書が優れている。実際、カレル＝ダンコースの著書が、レーニンの伝記であるよりは、彼を通して見るロシア革命論になっているのに対して、サーヴィスの著書は、公刊・未刊史料を駆使して、何よりもまずレーニンという人間を歴史の中に浮き上がらせることを目的としているように見える。

はじめに家系図について見てみよう。レーニンの母マリアの祖父モイシェ・ブランクがユダヤ人であったことは新情報ではないが、サーヴィスはここに、モイシェが熱心な反ユダヤ主義者であったという興味深い事実を付け加えている(したがってレーニンの思想と行動をユダヤ的背景から説明することは困難である)。また、マリアの母親アンナ・グロシヨフがルター派であることは知られていたが、サーヴィスによればマリア自身もまた、娘オリガ(レーニンの妹)をルター派の墓地に埋葬するほどに、ルター派へのこだわりを維持していた。他方でサーヴィスは、レーニンの父イリヤ・ウリヤノフが、カルムイク人の要素を受け継いでいたという通説に対しては慎重である。

全体としてサーヴィスは、世間に対して閉じこもり、マージナルな位置にありながら、まさにそれゆえに強い上昇志向をもってロシア文化に同化しつつある勤勉な一家として、ウリヤノフ家の像を描いている。自己を厳しく律し、勉学と仕事に励まねばならぬというのが、レーニンとその兄弟が両親から受けた教育であった。

カレル＝ダンコースが、世襲貴族というウリヤノフ家の特権的な社会的地位や、その「安楽な保守主義」を強調するのに対して、サーヴィスのこの認識は、節制や禁欲といったレーニンの性質の重要な側面を理解する上で、より有意義である。こうした性質は、後年のレーニンの政治活動を大きく規制するばかりでなく、彼をモデルにした「あるべきソヴィエト人」像にも、そのまま受け継がれることになるであろう（11）。家庭環境に関してはさらに、『アンクル・トムの小屋』や、農民生活をリアルに描いたグレーブ・ウスペンスキーの短編といった、レーニンの読書暦についてのサーヴィスの指摘も興味深い（12）。

家族との関連では、サーヴィスもカレル＝ダンコースもともに、一家の女性たちのレーニンに対する特別の態度とくに言及している。母、姉アンナ、妹オリガと MARIA は、期待あるいは崇拜の対象としてレーニンに常に気を配っていたのだった。この点に関するサーヴィスの評価は、レーニンは「家族の中の感情の相互作用を利用していくことを覚えた」、「母の聖人的なところを意図的に大いに利用していた」と、やや辛辣である。対照的にカレル＝ダンコースは、他の点ではレーニンに手厳しいのであるが、「もっとも狭い身内だけの世界での暖かく思いやりのあるレーニンがいた」と、どこか筆致が穏やかである。いずれにせよここで注目すべきは、文字通りのこの身内的な関係が、ボリシェヴィキ党の大事な構成要素になっていたことである。レーニンの妹や弟は彼の機関紙『イスクラ』の通信員であったし、妻のクループスカヤは長らくレーニンの個人秘書を務めていた。こうした家族関係が、ボリシェヴィキ党の組織において、その初期にも、またより後の時期にも大きな役割を果たしたことは、党組織が全体としてもつ、ある種の特質を集約的に示していたのではないだろうか。それは私的な、あるいは擬似家族的な人的結合ということである。もっとも本稿ではこの点に立ち入って論じることはしない。

レーニンの伝記を書くということは、ある程度までは妻クループスカヤの伝記を書くことでもある。実際サーヴィスの著作は、クループスカヤのパーソナリティを照らし出すことにも成功している。彼女がバセドー氏病に悩まされており、容貌まで変わってしまったこと、イネッサ・アルマンドに対する夫の感情に苦しめられながらも、両者の関係に寛容であったことなどの事実が、豊富な史料をもとに描き出される。内戦期にクループスカヤが、啓蒙活動のためにヴォルガ旅行を行なったことはよく知られているが、その背後に夫婦関係の緊張があったとは私は気づかなかった。「気の毒な女性であった」とサーヴィスはいうが、それでも夫と同様に政治的人間であった彼女の人生は、ともかくも充実していたというべきであろう。

他方、レーニンの恋人イネッサ・アルマンドに関しては、伝染病に倒れた後の最後の数日のメモが非常に印象的である。革命国家の理想が色あせる中で、彼女自身も「人民に対する愛と共感（…）の一切の源泉が枯果てた」と記して力尽きた。彼女の最期は十分に悲劇的であるが、かつて夫を捨てて義弟のもとに走ったことのある自由恋愛論者アルマンドの生涯には、どこか無軌道との印象を禁じ得ない。まさにそのような人間として、彼女もまた典型的な初期ボリシェヴィキの一人なのである。

レーニンのパーソナリティについてもう一点重要なことは、彼の病気である。二人の論者がともに指摘しているように、政治生活において激しい緊張を強いられたとき、レーニンはしばしば神経性の病気に悩まされた。革命前について見ると、カレル＝ダンコースによれば、『イスクラ』編集の疲労（1902）、第2回党大会後（1904）、1905年革命後（1906）、内部抗争からの疲弊（1911）といった機会に、レーニンは抑鬱状態に陥った。身内の女性たちの配慮、クループスカヤやジノヴィエフとの長い休養だけが、彼の気力を回復させるのであった。これがレーニンの個人的な問題に留まらないのは、革命後、彼の体調がその政策に大きく影響してくるからである。サーヴィスによれば、1918年春から夏にかけてレーニンは頭痛と不眠に悩まされており、「激しい昂奮状態におかれていたに違いない」。そのことは富農弾圧を呼びかける彼の電報の語調にも、はっきり反映されていたという。さらに、カレル＝ダンコースとサーヴィスはともに、1921年から22年にかけての抑圧措置の強化、すなわちメンシェヴィキとエスエルの迫害、教会弾圧、さらに知識人の大量追放も、レーニンが病気（既に致命的な脳の病気が始まっていた）のせいで、非常に怒りやすくなっていたことを抜きにしては理解できないと考える。同様にサーヴィスは、半身不随のレーニンが遺書の中で同志たちの人物評定をやったときにも、せつかな状態に置かれていたことに注意を向けている。私は先に、党組織の擬似家族的な性格について触れたが、これらのこともまた、レーニンの政治がときに、極めて私的な性格を帯びていたことを指し示し

ているのではないだろうか (13)。

このようにサーヴィスとカレル＝ダンコースの著書は、レーニンのパーソナリティを克明に描き出すばかりでなく、彼の政治における擬似家族的ないし私的な側面についても、重要な示唆を与えてくれる。ここで私がレーニンの政治、またソ連政治体制をこのような角度から捉えようとするのは、別にその否定的な面を暴露することを求めていることではない。そうではなく私は、レーニンの政治がもつ私的な側面に目を向けることによって、ソ連政治体制のもつ歴史的な特質、とりわけロシア帝国の家産制的な政治秩序との関連性を考える上で、必要な手がかりが得られるのではないかと考えているのである (14)。

2. レーニンとソ連体制の歴史的な位置づけ

では、サーヴィスとカレル＝ダンコースは、レーニンと彼の体制のもつ歴史的な位置についてはどのように考えているのであろうか。この点では二人の間には、かなりはっきりとした違いが見られるように思われる。もとより二人とも、一党制＝単一イデオロギー国家のもつ歴史的な新しさと、それを作り出す上でのレーニンの中心的な役割を認める点では同じである。だが、サーヴィスがロシア史の文脈から距離を置き、ソ連政治体制の歴史的な独自性を重視するのに対して、カレル＝ダンコースには、レーニンとソ連政治体制を論じる際に、ロシア史の文脈に目を向けようとする傾向が顕著に見られるのである。

まずサーヴィスの議論を見よう。彼は、「レーニンのロシア史への貢献は変革者というよりむしろ促進者としての貢献ではなかったか」という議論を批判して、「ロシア史と世界史には、レーニンなくしては起らなかったような歴史の転換点があった」と述べる。「ソヴィエト的な一党＝単一イデオロギー国家はレーニンなくしても生れたであろうか考えるのは(…)馬鹿げている」。

そうした国家を支える価値体系についてサーヴィスは、レーニンとボリシェヴィキの「政治観は、独裁、階級闘争、指導力、革命的没道徳主義を優先していた」と記す。これらの諸点は中世以来、ロシアとヨーロッパの歴史に見られる伝統であった。だが、20世紀になってこれらの伝統が再び現れるためには、「ロシアのマルクス主義政党が必要であった。さらに言えば、ほかならぬレーニンが必要であった」。

たしかにサーヴィスが論じるように、一党＝単一イデオロギー国家の成立はロシア史と世界史における大きな転換であったし、そのような転換はレーニンがいなければ起らなかったであろう。また、その国家を支える価値体系についても、サーヴィスの議論はおおむね妥当であろう。

だが、ソ連の歴史的経験をロシア史の文脈から可能な限り引き離そうとするサーヴィスの姿勢には、疑問を覚える (15)。それは、既に触れたように、レーニンの政治の私的な性質と帝政期の家産制との結びつきに対して私に関心をもっているからだけではない。政権を受容する側である民衆の権力観もまた、1917年を境にしてがらりと変わるわけにはいかなかったであろう (16)。さらに、多様な構成要素からなり、全体として発展の遅れた広大な国土を、限られた人員で統治しなければならないという条件をも、ソ連政府は帝政政府から引き継いでいた。そのような条件の下では、統治イデオロギーの相違にかかわらず、歴代のロシア統治者が取り得る可能性は、おのずから限られたものとなるであろう。最も可能性の高い選択肢は、普遍性を標榜する理念に基づく行政的な管理である。

他方で私は、サーヴィスがレーニンとその後継者たちについて、両者の連続性を強調しているのには共感する。彼によれば、「基本的な建物はレーニンの死去の数年前にすでに建てられていた。スターリンはそれに大きな変更を加えて彼個人の専制支配に変え、ソヴィエト国家内の党の権威を低下させた(…)。しかし本当のところ、建物の中核はそのまま残っていた」。

もとよりレーニンとスターリンの「相違」に対する関心が残らぬわけではないし、そのような問題設定が学問的な意義を失ったわけでもない (17)。だが、恐らくこの問題を生産的に検討するためには、ソ連史の枠組みを超えて、それをより長期的な近現代ロシア史の文脈中に置き直すことが、必要なのではないだろうか。実際、ロシア史の経験は、この問題を考える上で多くの示唆に富んでいる。たとえばニコライ1世とアレクサンドル2世の治世、あるいはアレクサンドル2世とアレクサンドル3世の治世には、政策の方向性において大きな違いがあった。だが、専制という統治原理自体は一向に揺るがなかったのである。

サーヴィスと比べてカレル＝ダンコースの議論には、一貫してロシアの革命家・政治家としてレーニン捉えようとする姿勢が顕著である。たとえば彼女は、レーニンの帝国主義論の源には、ロシアの特殊な帝国構造に対する彼の認識があったと指摘する。すなわち、海外に植民地をもつ西欧諸国と比して、ロシアの社会主義勢力は強力であった。「なるほどロシアもやはり植民地を持つが、ロシア帝国の性格は他のヨーロッパ列強の帝国のそれとは極めて異なる。ロシアの広大な帝国は、領土が「陸続き」であり、さまざまな民族が入り組んでおり、特に早くも1905年より周辺部の植民地的地域で革命運動が発展しているという特徴がある。レーニンはこうしたばらばらの事実を一貫性ある総体に統合する努力をし、そこから、ヨーロッパの社会主義が経験している危機に説明を与えるのは帝国主義であるとの結論を引き出す」。ユーラシア帝国の構造に対する観察が、世界規模の現状認識の根底にある、とするカレル＝ダンコースのこの議論には、ロシアの革命家レーニンが提示した秩序変革プログラム（帝国主義論）の独自のダイナミズムが、よく照らし出されているといえる(18)。

同様にカレル＝ダンコースは、植民地世界の民族運動とヨーロッパ諸国の社会主義者の共闘というレーニンのヴィジョンをも、ロシアの革命家独自のプログラムとして理解する。そのヴィジョンは、「ロシアにとって決定的なある問題に関する彼の考察から出発して形成されたものである。その問題とは民族運動であり、労働者運動が民族運動に与えるべき地位の問題である」。カレル＝ダンコースによれば、このヴィジョンにはさらに、「民族的騷擾が(…)ロシア帝国内に留まらず世界の到る所で重要性を帯びつつある」だけに、「歴史的に遅れた特殊な国というロシアの特性を隠蔽し、ロシアに革命運動における中心的地位を与えるという利点があった」。ここでカレル＝ダンコースは、国際秩序の中でのロシア世界の時間的（先進か後進か）および空間的な位置（中心か周縁か）に関する、ロシア人の中での古くからの議論に立ち返り、レーニンをその末裔と捉えているのである。

したがってレーニンとロシア革命の歴史的な位置づけに関しても、サーヴィスと対照的にカレル＝ダンコースは、何よりもまずロシア史の文脈を重視する。いわく「ロシア人のレーニンは、すべてのロシア人と同様に、ロシアの本性に関する、またロシアの進歩を確実にするために取るべき道に関する、古くからの議論の後継者であった」。カレル＝ダンコースによれば、ロシアを「アジア的野蛮」から引き剥がすための唯一の、そしてもっとも確実な道は革命である」というレーニンの考えこそが、ロシア史に次のような逆説的な結果をもたらしたのである。「革命によって西欧化するという強固な意志をもって、権力と社会の関係に関する自分の考え方を近代化に適用することによって、レーニンは進行中の近代化を停止させ、前進しつつあった民主主義を廃して、代わりに全体主義体制を据えつけ、ロシアを長きにわたり西欧世界から遠ざけることになったのである」。こうしてカレル＝ダンコースの著作は、あくまで「ロシアを統治する人物にして、同時に革命家である者」としてのレーニン論として、環を閉じるのである。

むすび

以上に見たように、サーヴィスとカレル＝ダンコースのレーニン論は、多くの点で重なりつつも、全体を貫く視線には、大きな違いが見られる。サーヴィスが、ロシアという個別の文脈による説明を極力回避しようとするのに対して、カレル＝ダンコースは、ロシアの革命家としてのレーニンにあくまでこだわるのである。私は、後者の方により共感する。

もちろん私は、レーニンはロシア帝国における近代化の進捗と民主主義の前進を廃して、かわりに全体主義を据えつけたとするカレル＝ダンコースの結論を、そのまま受け入れるわけではない。そこにはまず、帝政末期の近代化と「民主主義の前進」に対する過大評価があるように思われる。また、ソ連の体制は一言で「全体主義」と呼べるほどに現代的なものだったのか、との疑問も生じてくる。たしかに統治のテクノロジーは現代的であったかもしれないが、ソ連政治体制にはむしろ、近現代社会とは異質のライトウルギー（対国家奉仕義務）の要素が色濃く見られたのではないだろうか(19)。この点で、帝政末期の政治・社会状況に関するロシアの歴史家ブルダコフの次のような言葉は、示唆的である。「問題は（あるいは不幸は）、ロシアのように超複雑に組織されたシステムにとっては、均衡の喪失こそが何よりも危険であったということである。と言う

のはそうした喪失は常に、「安定を取り戻すための」後方への退却を伴うからである」(20)。

とはいえ、革命後のソ連における20世紀的＝世界史的な文脈と前近代的＝ロシア史的な文脈との相克の解明は、われわれ自身を取り組まねばならぬ課題であろう。その課題を果たす上で、サーヴィスとカレル＝ダンコースの二つのレーニン論は、そのいずれもわれわれに大きな示唆を与えてくれるのである。

注釈

1. 塩川伸明「二つのゴルバチョフ論」上下、『UP』、315号、1999年1月；316号、1999年2月。
2. 1999年に出た史料集『ヴェ・イ・レーニン：知られざる文書』で紹介されている数字である。В. И. Ленин. Неизвестные документы. 1891-1922. М., 1999. С.3. その後、『ソヴィエト政権法令集』は第17巻まで出て、現在も刊行中である。
3. Там же. С.5-6.
4. 同年に出た英語版が、1996年に『レーニンの秘密』として邦訳されている。ドミートリー・ヴォルコゴノフ『レーニンの秘密』上下（白須英子訳）、NHK出版、1995年。
5. 1996年に出たラティシエフの『秘密を解除されたレーニン』にも同様の傾向が見られる。А. Г. Латышев. Рассекреченный Ленин. М., 1996.
6. *The Unknown Lenin: From the Secret Archive*. Ed. by Richard Pipes, Yale University Press, New Haven and London, 1996.
7. В. И. Ленин. Неизвестные документы. 1891-1922.
8. Н・カレル＝ダンコース『レーニンとは何だったか』（石崎晴己・東松秀雄訳）、藤原書店、2006年。大部の著作を翻訳された訳者の労には敬意を表したいが、ロシア語の訳に少なからず誤りが見られるのは残念である。たとえば「ヴ・ペリョート」は「フペリョート」、「マイケルソン工場」は「ミヘリソン工場」、「ブディエニー」は「ブジョンヌイ」である。
9. パイプスの誤った注釈をカレル＝ダンコースが鵜呑みにしている箇所も見られる。たとえばカレル＝ダンコースはパイプスの史料集に依拠して、1918年9月3日か4日にレーニンがテロルを準備する委員会の設置を促したと述べるが（430頁）、このときレーニンは暗殺未遂事件直後で活動不能であった。В. И. Ленин. Неизвестные документы. 1891-1922. С.583, 参照。
10. ロバート・サーヴィス『レーニン』上下（河合秀和訳）、岩波書店、2002年。ロシア語訳に誤りが多いのは残念である。たとえば「リーバー」は「リーベル」、「ゼレジンヤコフ」は「ジェレズニャコフ」、「ダル」は「ダーリ」である。
11. Nina Tumarkin, *Lenin Lives! The Lenin Cult in Soviet Russia*, enlarged edition, Harvard University Press, Cambridge, 1997, 参照。
12. もっとも『アンクル・トム的小屋』がレーニンやケレンスキーの愛読書であったことには、ハリソン・ソールズベリーがだいぶ前に着目している。ハリソン・E・ソールズベリー『黒い夜白い雪 ロシア革命1905 - 1917年』上（後藤洋一訳）、時事通信社、1983年、24、29頁。
13. 同様に、レーニンの政治には悪い意味でのアマチュアリズムの要素が少なからず見られた。ヴォルコゴノフのレーニン伝の解説の中で、山内昌之氏が、「晩年のレーニンが日夜直面した仕事は、中年後期になるまで、まるで社会的自覚や責任をもたずに自由気儘な生活を送っていた人間には大きすぎるものであった」と書いているのは適切である。山内昌之「革命家と政治家との間——レーニンの死によせて」、ヴォルコゴノフ『レーニンの秘密』下、382頁。
14. 私の問題関心については、池田嘉郎「革命期ロシアにおける労働とネイション・ビルディング」、『ロシア史研究』、第78号、2006年5月、参照。
15. ただしサーヴィスは、ロシア革命に関する通史では、ロシア史の長期的な文脈により大きな注意を払っている。ロバート・サーヴィス『ロシア革命 1900 - 1927』（中嶋毅訳）、岩波書店、2005年。
16. これはブルダコフのロシア革命論『赤い動乱』を貫く主張である。В. П. Булдаков. Красная смута.

Природа и последствия революционного насилия. М., 1997.

17 以下を参照。グレイム・ギル『スターリニズム』（内田健二訳）、岩波書店、2004年、124頁（訳者解説）；サーヴィス『ロシア革命』（中嶋毅訳）、149頁（訳者解説）。

18. 「アジアとヨーロッパの間にあるロシア」の革命という観点は、日本の歴史家も伝統的に重視してきたものである。たとえば、和田春樹『マルクス・エンゲルスと革命ロシア』、勁草書房、1975年；山内昌之『スルタンガリエフの夢：イスラム世界とロシア革命』、東京大学出版会、1986年；高橋清治『民族の問題とペレストロイカ』、平凡社、1990年。

19. ライトウルギー、また、それと密接に結びつく家産制概念を用いて近現代ロシア史を包括的に捉えるという視角を、私はパイプスから学んだ。Richard Pipes, *Russia under the Old Regime*, Penguin Books, London, 1974; リチャード・パイプス『ロシア革命史』（西山克典訳）、成文社、2000年、399頁、参照。

20. ヴェ・ベ・ブルダコフ「20世紀初頭のロシア帝国に関する現代の論争」（池田嘉郎訳）、『ロシア史研究』、第73号、2003年10月、28頁。

参考図書

Richard Pipes, *Russia under the Old Regime*, Penguin Books, London, 1974

Nina Tumarkin, *Lenin Lives! The Lenin Cult in Soviet Russia*, enlarged edition, Harvard University Press, Cambridge, 1997

The Unknown Lenin: From the Secret Archive. Ed. by Richard Pipes, Yale University Press, New Haven and London, 1996

В. П. Булдаков. *Красная смута. Природа и последствия революционного насилия*. М., 1997

В. И. Ленин. *Неизвестные документы. 1891-1922*. М., 1999

А. Г. Латышев. *Рассекреченный Ленин*. М., 1996

池田嘉郎「革命期ロシアにおける労働とネ이션・ビルディング」、『ロシア史研究』、第78号、2006年5月
ドミートリー・ヴォルコゴノフ『レーニンの秘密』上下（白須英子訳）、NHK出版、1995年

Н・カレル＝ダンコース『レーニンとは何だったか』（石崎晴己・東松秀雄訳）、藤原書店、2006年

グレイム・ギル『スターリニズム』（内田健二訳）、岩波書店、2004年

ロバート・サーヴィス『レーニン』上下（河合秀和訳）、岩波書店、2002年

ロバート・サーヴィス『ロシア革命 1900 - 1927』（中嶋毅訳）、岩波書店、2005年

塩川伸明「二つのゴルバチョフ論」上下、『UP』、315号、1999年1月；316号、1999年2月

ハリソン・E・ソールズベリー『黒い夜白い雪 ロシア革命1905 - 1917年』上下（後藤洋一訳）、時事通信社、1983年

高橋清治『民族の問題とペレストロイカ』、平凡社、1990年

リチャード・パイプス『ロシア革命史』（西山克典訳）、成文社、2000年

ヴェ・ベ・ブルダコフ「20世紀初頭のロシア帝国に関する現代の論争」（池田嘉郎訳）、『ロシア史研究』、第73号、2003年10月

山内昌之『スルタンガリエフの夢：イスラム世界とロシア革命』、東京大学出版会、1986年

山内昌之「革命家と政治家との間——レーニンの死によせて」、ヴォルコゴノフ『レーニンの秘密』下、所収
和田春樹『マルクス・エンゲルスと革命ロシア』、勁草書房、1975年